

S O U

奏
Autumn 2025

JTB 感動のそばに、いつも。



新しい国との出会いをこの秋に

大阪では大阪・関西万博が開催されており、大勢の方が訪れ大盛況です。日本では馴染みの薄い国のパビリオンも多く、新しい国との出会いは万博の一番の醍醐味ではないでしょうか。

会場内では様々な国の音楽も流れており、心地よい潮風と共に素敵な空間が広がっています。ぜひ、万博で出会った素敵な国々に実際に行ってみませんか？パビリオンだけでは見る事のできない魅力が世界にはたくさんございます。

私たちJTBは新たな国への旅のお手伝いをいたします。

(株)JTB大阪第二事業部

〒541-0056
大阪市中央区久太郎町 2-1-25 (JTBビル12階)
TEL.06 (6260) 0150 (代) FAX.06 (6260) 0178
担当: 岡田 悠

VOL.
64

CONTENTS

- | | |
|------------------------------------|---------------------------------|
| 1 廣津留すみれさんに聞く 室内楽との出会いとその魅力 | 9 民族楽器で旅する世界 vol.6 モンゴル |
| 4 トップアンサンブル シリーズ 2025-2026 | 11 プロデューサーが往く! ボルドー |
| 5 「曲がった家を作る人 ― 故郷に響く西村朗の音楽」開催レポート | 13 作曲家の部屋 vol.6 ラヴェルとモンフォール＝ラモリ |
| 7 こどもクラシック ミュージックアトリエ vol. 08 レポート | 15 名曲誕生! vol.5 モーツァルトのフルート四重奏曲 |
| 8 グランプリ・コンサート2025 テンゲル・アヤルゲー | 17 宗次ホール弦楽四重奏コンクール レポート |

編集・発行  公益財団法人
日本室内楽振興財団

〒540-8510 大阪市中央区城見1丁目3-50
TEL.06-6947-2183 FAX.06-6947-2198
<https://jcmf.or.jp>



対 談

廣津留すみれさんに聞く 室内楽との出会いとその魅力

廣津留すみれ × 河井 拓

(ヴァイオリン)

(大阪国際室内楽コンクール&フェスタ 総合プロデューサー)

取材・文 高坂はる香(音楽ライター)

生まれ故郷の大分でヴァイオリンを始め、18歳で渡米。
ハーバード大学、ジュリアード音楽院で学び、現在は演奏家としてだけでなく、
起業家、著作家、コメンテーターとしても活躍する、廣津留すみれさん。
共通の音楽家の知人も多いという大阪国際室内楽コンクール&フェスタの河井拓総合プロデューサーが話を聞いた。

初めてのアンサンブル経験は、
ハーバード大学の室内楽クラス

河井 日本でヴァイオリンを習う子どもたちは、室内楽を経験する機会が少ないという現状がありますが、廣津留さんも子どもの頃はソロの勉強が中心でしたか？

廣津留 なにしろ大分ですから、そもそもこの世で私以外にヴァイオリンを弾く人はいるのだからかと思うくらい、周りにヴァイオリンをやっている子がいませんでした。同世代のレベルも全く知らず、CDで聴くハイフェッツやパールマンが唯一の比較対象でしたから、小学3年生で初めてコンクールに参加したときは、自分は彼らみたいに上手じゃないのに出ていいのだからかと思っていました(笑)。ただそうして何も知らず、巨匠の演奏に憧れ、のびのび弾けていたのは逆に良かったのかもしれません。

別府アルゲリッチ音楽祭が身近だったことも大きかったです。ギトリスやマイスキのような一流音楽家の仲間を連れてきて、毎年

いろいろな室内楽作品を演奏してくれました。温泉や食を気に入ってくれたのか、キャンセルすることもなく！当時はアルゲリッチが自分の街にくることが当たり前だと思っていましたが、とても恵まれた環境ですよ。

河井 そして高校3年生の1年で集中的に勉強して、ハーバード大学に合格されました。誰かと一緒に演奏することは、留学後初めて経験されたのですか？

廣津留 はい。ハーバードの学生は約6〜7割が楽器を演奏できると言われていて、上手な人もたくさんいます。室内楽の授業に登録したところ、彼らはユースオーケストラやジュリアード音楽院プレカレッジで顔見知りのようで、みんな事前にアンサンブルを組む約束をした状態でクラスをとっていました。大分上野丘高等学校から突然紛れ込んだ私はどうしようかと思いましたが(笑)、余ったメンバーの、ファゴット、フルート、ヴァイオリンという世にも珍しいトリオで、バッハの「音楽の捧げ物」をやることになりました。

ある日授業にゲストが来るというので誰かと思ったら、近所に住んでいたヨーヨー・マさんがからっと現れました。私たち三人組もレッスンを受けることができ、この大学はとんでもないなと思いましたね。

またクラスではみんなの前で演奏したあと、お互いフィードバックをしながらはげません。授業で発言をする

アメリカのスタイルには慣れてきていましたが、音楽のクラスでそれをするということは、同級生を批評するスタンスで聴くということ。簡単ではありませんが、お互い高め合えるおもしろい環境でした。

河井 そのあたりの感覚が求められるのは、ソロと室内楽の取り組みにおける大きな違いでしょうね。音楽を作るにあたって、自分たちがどうしたいか、意見を言い合うことが基本です。

廣津留 そうですね、特にアメリカの場合、異なる文化的背景の学生同士で演奏するケースが多いので、意見を伝え合わないとなるとなりません。教育の現場ではリーダーシップについて考える機会が多く、そのうえで室内楽はとても良い題材だと思います。

私は秋田の国際教養大学で「Music Beyond Borders」という音楽を通して教育や脳などの学問分野を学ぶ授業を担当しています。もちろん音大ではありませんが、リーダーシップについて考える回では、カルテットの演奏を見て誰がリードをとっているかを考えてもらいました。演奏しない人にとって

はバツと見てもわからないものですが、実際、そこでどんなリーダーシップが働いているか、作品や場面でそれがどう変わるのかを考える

と、多くのことを気づかせてくれます。



Taku Kawai

れました。ヨーロッパという選択肢もあったと思いますが、ニューヨークを選ばれたのはなぜですか？

廣津留 卒業後もアメリカに残りたいと思い、企業に入るかフリーランスで働こうかと考えていたとき、ヨーヨー・マさんのシルクロード・アンサンブルと共演する機会がありました。メンバーにジュリアードの人もしらっしやり、話を聞くうち、音楽はかりに囲まれた環境で学ぶのも楽しそうだと思い、進学を決めました。

河井 室内楽に触れる機会が増えましたか？

廣津留 増えましたね！2セメスターの室内楽クラスは必修だと新入生オリエンテーションで聞いて、たまたま近くに座っていた4人で弦楽四重奏を組みました(笑)。カルテットはみんな同じタイプだとやりにくいことがありますが、相性もよく、役割分担もうまくできていました。アンソニア・カル



Sumire Hirotsuru, Violin

ザ・フェニックスホールに集う トップアンサンブル シリーズ 2025-2026

弦楽四重奏の潮流

今シーズンのトップアンサンブル シリーズでは、ハイドンが確立した弦楽四重奏曲の、各国での展開と継承をお楽しみいただけます。
ドイツ、イギリス、日本を代表する稀代のカルテットが、独自のレパートリーで弦楽四重奏曲の魅力を引き出します。

ドーリック・カルテット(イギリス) DORIC STRING QUARTET / U.K.

第6回
大阪国際室内楽
コンクール
第1位

～ハイドン以前、そしてイギリスのモダン～

ドーリック・カルテットは、2023年に結成25周年を迎え、各メンバーはより一層深い解釈を求め続けている。古典派から現代音楽におよぶ幅広いレパートリーをその優雅さと親密な演奏により、世界中のファンを魅了し続けている。その知的な厳格さを持って、ハイドンからメンデルスゾーンまでのクラシックのレパートリーは特別に作られたオリジナルスタイルの弓で演奏し、ブレット・ディーンなど現代音楽の初演も手掛ける。出演はコンサート・ハウス、ウィーン・コンツェルトハウス、エルプ・フィルハーモニーの欧州主要会場だけでなく、カーネギーホール(アメリカ)、サントリーホール(日本)、ムジカ・ヴィヴァ(オーストラリア)など世界中にわたる。また、アダムズの「弦楽四重奏とオーケストラのためのAbsolute Jest」を作曲家の指揮でオーストリア初演を担当した。シャンドスからリリースされたCDは数多くの好評を集め、近年ではベートーヴェン没後200周年の2027年に向けて、ベートーヴェン全曲録音に着手した。後進の指導にも熱心で、2015年から王立音楽アカデミー指導職にあり、さらに2018年からはメンデルスゾーン・オン・マル・フェスティバルの芸術監督を務めている。

カルテット・エクセルシオ(日本) QUARTET EXCELSIOR / JAPAN

第2回
大阪国際室内楽
コンクール
第2位

～弦楽四重奏に託されたオーストリア、チェコ、日本の歌心～

桐朋学園大学在学中に結成し、2024年結成30周年を迎えた。「繊細優美な金銀細工のよう」(独フランクフルター・アルゲマイネ紙)と2016年ドイツデビューで称賛された、日本では数少ない常設の弦楽四重奏団。3本の柱『定期公演』『現代曲』『アウトリーチ』を中心に様々なシリーズで室内楽の活動を展開。国際社会における日本の文化交流も積極的に行い、海外公演も重ねている。1996年に大阪国際室内楽コンクール第2位、2000年にパオロ・ボルチアーニ国際弦楽四重奏コンクール最高位、第19回新日鉄音楽賞「フレッシュアーティスト賞」、第16回ホテルオークラ音楽賞など受賞。2016年にサントリーホールでベートーヴェンの弦楽四重奏全16曲を日本人団体として初演奏。同年6月まで6年間『サントリーホール室内楽アカデミー』にてファカルティを務め、引き続き後進の指導にもあたっている。多数の録音を残していて、日本人団体として初のベートーヴェン弦楽四重奏曲全曲録音を完結させ、2024年12月にはモーツァルト「ハイドン・セット」全6曲を発売した。J:COM浦安音楽ホールレジデンシャル・アーティスト、秋川キララホールミュージック・アンバサダー。

チケット(発売中)	一般 5,000円／ザ・フェニックスホール友の会 4,500円／学生 1,500円 全席指定 ※学生券はザ・フェニックスホールチケットセンターのみ取り扱い(学生券は25歳以下、要学生証提示)
チケット取り扱い	●ザ・フェニックスホール チケットセンター 06-6363-7999(平日10:00～17:00 / 土日祝 休業) ●チケットぴあ、イープラス



2025 10/25(土) 15:00 開演

マイア・カベザ(ヴァイオリン)／イン・シュー(ヴァイオリン)
エマ・ヴェルニグ(ヴィオラ)／ジョン・マイヤースコウ(チェロ)
J.S.バッハ：フーガの技法 BWV1080より 4つのフーガ
ハイドン：弦楽四重奏曲 ヘ短調 op.20-5
ブリテン：弦楽四重奏曲 第3番 op.94

※当初発表していたアレクサンドル・レディントン(ヴァイオリン)、エレネ・クレマン(ヴィオラ)から、メンバーが変更になっています。



2026 1/31(土) 15:00 開演

西野ゆか(ヴァイオリン)／栗津惇(ヴァイオリン)
吉田有紀子(ヴィオラ)／大友肇(チェロ)
ハイドン：弦楽四重奏曲 二長調 op.76-5「ラルゴ」
シュルホフ：弦楽四重奏のための5つの小品
幸松肇 編曲：弦楽四重奏のための日本民謡集から
「箱根八里」、「佐渡おけさ」
シューベルト：弦楽四重奏曲 第14番 二短調 D810「死と乙女」
※当初発表していた北見春菜(ヴァイオリン)から、メンバーが変更になっています。

会 場	 あいおいニッセイ同和損保 ザ・フェニックスホール 530-0047 大阪市北区西天満4-15-10 あいおいニッセイ同和損保フェニックスタワー内
-----	--

終了公演 シューマン・カルテット(ドイツ) SCHUMANN QUARTET / GERMANY

第7回
大阪国際室内楽
コンクール
第2位



2025 6/8(土)

ハイドン：弦楽四重奏曲 ハ長調 op.54-2
ベートーヴェン：弦楽四重奏曲 第10番
変ホ長調 op.74「ハーブ」
ベートーヴェン：弦楽四重奏曲 第15番
イ短調 op.132

8年ぶりに日本を訪れたシューマン・カルテット。シューマン兄弟を中心とした抜群の呼吸と対話力が持ち味の団体で、その活躍はヨーロッパにとどまらず、米ニューヨークのリンカーンセンター室内楽協会のレジデントプログラムに抜擢されるなどアメリカでも注目を集めています。大阪ではハイドンの中期作品に加え、ベートーヴェンの軽やかで生氣に満ちた第10番「ハーブ」と、このジャンルの金字塔とされる第15番を演奏。個々の音楽への深い理解と技術的成熟に裏打ちされた珠玉のアンサンブルで聴衆を魅了しました。大阪公演終演後すぐに東京へと旅立った彼らは、サントリーホールの「チェンバーミュージック・ガーデン 2025」に出演。目玉企画であるベートーヴェン弦楽四重奏曲全曲演奏会全6公演を成功させ、喝采を浴びました。大阪国際室内楽コンクールでの入賞から14年の時を経て、ますます深みを増したシューマン・カルテットの音楽。今後のさらなる活躍が楽しみです！



テットと名前をつけて、MOMA(ニューヨーク近代美術館)やリンカーンセンターなどいろいろな場所で活動しました。

河井 固定メンバーで室内楽に取り組むことで、音楽へのアプローチは変わりました？

廣津留 ソロの時は弾きたいように弾けば良いですが、カルテットでは自分がどう弾くかが他の人のリアクションを変えるので、より責任重大です。例えば弓を最後にどう収めるかという細かいところも、グループで演奏するからこそ気を配るようになり、結果的にソロでも几帳面に気にするようになりました。予想外の影響です。

また私たちは誰かの意見に合わせるのではなく、それぞれ提案を試してから選ぶ民主

的方法を大切にしていたので、コミュニケーションの末に弾き方を決めるという、ソロでは得られない経験ができました。コンセンサスが取れていない状態でレッスンに行く、先生にすべバレてしまっていますからね。

河井 以前、東京クワルテットの池田菊衛

さんが「カルテットを演奏することは、音楽家にとって大きな学びになります。同僚でもあり、時に批判をしてくれる先生でもある3人のメンバーとともに音楽を創ることは成長につながります」と話していました。他のメンバーから良いことばかり言われるわけではないと思いますが、それでも演奏家がカルテットをやりたいと思うのはなぜでしょう？

廣津留 まず素晴らしいレパートリーがたくさんあるから、そして、そんな魅力的な曲をやっているとき、自分では気づかないアイデアをもらえるからでしょう。歳を重ねるほどそういう機会はより貴重になります。

タンゴで広がる音楽活動と、クラシックとの違い

河井 最近「たぬきタンゴカルテット」を結成されましたね。

廣津留 もともとジュリアードの修アリサイタルでピアノが弾きたくて、アルゼンチン人のすばらしいバンドネオン奏者呼んだことがきっかけで、ニューヨークでいろいろなタンゴ奏者と共演したり、ブエノスアイレスで録音したりする機会がありました。その後コロナをきっかけに日本に戻りましたが、

やはりタンゴがやりたくてカルテットを結成したのです。

日本たぬきつて、日本固有の生き物なんです。日本ならではのタンゴを海外に発信したいという思いでこの名前をつけました。あと、私が昔からたぬきが好きだというのも理由です(笑)。

河井 演奏している感覚は、クラシックの弦楽四重奏と違いますか？

廣津留 タンゴの人たちってキューを出さないんですよ。フットを吸って合わせることもせず、みんな前を向いて自分のことをやりながら、それが個々につながって一つの音楽ができるのが良い、という感じ。おもしろいですよね。即興も多いので、クラシックをやってきた身としてはやりがいがあります。タンゴはライブワークです。

河井 アメリカの室内楽協会ではジャズも室内楽のうちという定義があるくらいで、ジャンルについてボーダレスですね。

廣津留 日本ももっとそうなるといいですよ。技術的にもすばらしい方達がジャズやポップスに挑戦したら、すごいものができそう。そこから入ってクラシックを聴く聴衆もいるでしょう。



廣津留すみれ Sumire Hirotsuru

ハーバード大学在学中より世界的チェリスト、ヨーヨー・マと度々の共演を経て、米国を拠点に演奏活動を展開。近年はソリストとしてデンマーク国立フィル日本ツアーや国内主要音楽祭に出演するほか、全国でリサイタルツアーを開催。ジャストランベッターのクリス・ボッティとの海外公演やブエノスアイレスでのタンゴ録音など、ジャンルを超えて活動中。ジュリアード音楽院修了。国際教養大学特任准教授、第13期中央教育審議会委員。

河井 確かに、それは一つのアイデアかもしれませんが！クラシックに詳しくない方からすると、室内楽っていわれてもどういいうものなのかピンとこないみたいですから。

河井 私たち日本室内楽振興財団としては、そうして室内楽がもっと広まったらと思うのですけれど……統計的に、公演数はオペラやオーケストラとあまり変わらないのですが。

真夏のヘテロフォニー

『曲がった家を作る人 ― 故郷に響く西村朗の音楽』
パーカッション・アンサンブルを聴いて

新鮮だったのは和楽器であるはずの十七絃等の音色がそのアイデンティティを一新し、むしろ大陸的とも言える色彩を湛えていたことだ。それは古代の韓国から中国を超えて、西域へと延びるシルク

文：逢坂聖也

大阪芸術大学卒業後、大手情報誌に勤務。映画を皮切りに音楽、演劇などの記事の執筆、配信を行う。2010年頃からクラシック音楽を中心とした執筆活動を開始。現在はフリーランスとして『音楽の友』『ぶらあぼ』『びあ』などのメディアに執筆するほか、ホールや各種演奏団体の会報誌に寄稿している。大阪府豊中市在住。

全3日にわたって行われた作曲家・西村朗の回顧展『曲がった家を作る人―故郷に響く西村朗の音楽』。7月10日、読売テレビ10ホールで行われた、その第2夜『パーカッション・アンサンブル』（演奏：Soai Percussion Ensemble／片岡リサ）を聴いた。

西村朗はロマン主義者である、というのが私の考えだ。現代音楽の作曲家にロマン主義者というのも変かも知れないが、西村の作品は常に先行する強い理想に彩られていた。東洋世界は西村のイメージの源泉である。その中においてヘテロフォニーは技法という以上に、1つの思想として彼の作品と分かちがたく結びついている。晩年近くには、そこに人間の生と死への問いかけが色濃くにじんだ。私が彼をロマン主義者と呼ぶのはそうした理由による。

今回の『パーカッション・アンサンブル』で私が興味を持っていたのは、ヴァイオリンやチェロなどに比べるとはるかにプリミティブな打楽器という作品群の中で、西村のヘテロフォニーがどのように発現しているのか、ということだった。

1曲目に置かれたのは『唄（カムナギ）』。韓国の「カヤグム散調」を聴き、感銘を受けて作曲したと西村は語っているが、その響きはまったく独自のものである。「唄」とは巫女のこと。導入部では精霊を召喚するかのような、宮本安子の繊細な打楽器の響きが印象的だ。そして一定のリズムが繰り返される主部では、片岡リサの十七絃等による異国的な旋律が舞曲の熱を帯びる。

ロードの響きである。西村が思い描いていたであろう汎アジア的世界へと、聴く者を誘うオープニングだった。

ところで読売テレビ10ホールはもともとテレビ収録用のスタジオである。残響がないため室内楽などには向かないが、パーカッション・アンサンブルの場合は音がダイレクトに客席に届く。ミニマルミュージック的な要素の強い『エクタール』や『ペンタ』といった作品では音と視覚の乖離がほとんどなく、奏者の集中力がその息遣いとともにも感じられる面白さがあつた。

この公演から2日後の7月12日、大阪夢洲の万博会場で私は再び『ケチャ』を聴くことができた。同じSoai Percussion Ensembleによる、今回の西村朗シリーズの番外編とも言える公演であつたが、その印象はまったく異なっていた。会場のフエスティバルステーションは何といても仮設のステージであり、読売テレビ10ホールの音響は望むべくもない。ところがその極めて「ガレージ的」な環境の中で届けられた『ケチャ』の響きは、先のホールでの迫力を凌ぐものだった。

「曲がった家を作る人 ― 故郷に響く西村朗の音楽」
開催レポート

あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール、住友生命いずみホール、日本室内楽振興財団による3団体合同企画「曲がった家を作る人―故郷に響く西村朗の音楽」が、盛況のうちに幕を閉じました。音楽界に大きな足跡を残した大阪出身の作曲家、西村朗。2023年に69歳で亡くなった西村の数々の楽曲を、2025年6月のプレ・イベントと7月の3ジャンル（弦楽四重奏、パーカッション・アンサンブル、室内オーケストラ）のコンサートで紹介しました。

これらの公演は、西村朗がどのような作曲家で、何を考え、どんな音楽を残したのかを改めて伝える貴重な機会となりました。彼が遺した珠玉の作品は、今後も多く多くの演奏家や聴衆によって受け継がれていくことでしょう。

さらに、大阪・関西万博フェスティバル・ステーションでもパーカッション・アンサンブル公演を行いました。西村はアジアの芸能や文化に大きく影響を受けた作曲家として有名ですが、パーカッション・アンサンブル作品には特にその要素が詰まっています。アジア圏の文化に強い関心を持ち、自身の作品に積極的に取り入れてきた西村の姿勢は、「世界の文化交流を通じてより豊かな文化を創造する」という万博のテーマとも深く共鳴しています。こうした背景から、万博でのステージが実現することとなりました。

ここでは、日本室内楽振興財団の主催で6月4日に行ったプレ・イベント「西村朗を語る」と、7月10日に読売テレビ10ホール、7月12日に大阪・関西万博で開催したパーカッション・アンサンブル公演を振り返ります。

プレ・イベント「西村朗を語る」



西村朗と親交の深かった3人の方が登壇しました。西村の著書『光の雅歌 西村朗の音楽』（春秋社、2005年）で聞き手を務めた沼野氏は、西村について「西洋に対する東洋という図式ではなく、彼自身の中にアジア的な音楽が存在しており、それを掘り出すことに成功した作曲家。彼の作品はすでに世界各地で演奏されてきたが、もつと世界に知られてよいと思う」と語りました。

6月4日 読売テレビ10ホール

【出演】お話：沼野雄司（音楽学者）、池辺晋一郎（作曲家）、小味洸彦之（音楽評論家）

西村の10年先輩にあたる池辺氏は、西村が「自分の曲はすべて親戚同士」と話していたことに触れ、「同じ方法論で書かれている点は、私自身の作曲とは正反対だからこそ惹かれた。多彩であつて、なおかつ同じ色でもあることが西村朗のすごさであり、不思議さでもある」と振り返りました。

また、西村が創立時から音楽監督を務めたいずみシンフォニエッタ大阪でステージマネージャーとして関わっていた小味洸氏は、「彼がリハーサルを欠席することも、議論になつて現場が慌てるような雰囲気になることも一度もなく、繰り返しられる音楽に常に冷静に対峙していた」と当時を回想しました。

びつしりと音符が書き込まれた楽譜を見ながら音源を聴く場面もあり、また西村とのお酒の席での愉快なエピソードも飛び出すなど、充実した1時間半でした。

パーカッション・アンサンブル



7月10日 読売テレビ10ホール

【出演】Soai Percussion Ensemble*、片岡 リサ（十七絃等）

※パーカッション：中谷 満、宮本 実子、畑中 明香、川向 志保、松本 優輝、石垣 真結子、落合 空千、小野 竜聖、花田 零、星山 理奈、高 真炫、川久 珠寿、林 壮馬、松本 知曉

【曲目】唄（カムナギ） 十七絃等と打楽器のための
エクタール 3人のマリンバ奏者と2人の打楽器奏者のための
キトラ 8台のマリンバのための
ペンタ 5人の打楽器奏者のための
ケチャ 6人の打楽器奏者のための PA：永松ゆか、牛山泰良

7月12日 大阪・関西万博フェスティバル・ステーション

【出演】Soai Percussion Ensemble、The Resonanz Children's Choir

【曲目】スティヴ・ライヒ：木片のための音楽
スティヴ・ライヒ：バラフォン・フェイス
アンドリュー・ピール：ランチョジュビリー
西村朗：ケチャ 6人の打楽器奏者のための



メンバー(写真左から)

テムジン・ブレブフー（馬頭琴）／ ツェベグスレン・ツェレンバルジル（リンベ）
パダルチ・バトオルシフ（ヨーチン）／ ジュルメドルジ・ノルドグ（エベルプレー）
ムンフェルデネ・エルデネバト（バス馬頭琴）

大阪国際室内楽フェスタ2023での熱演をYouTubeでチェック！



大阪国際室内楽コンクール&フェスタの3部門優勝団体による副賞の日本国内ツアーとして、毎年全国各地で実施している「グランプリ・コンサート」。2025年は、大阪国際室内楽フェスタ2023において圧倒的な票数を獲得してメニューイン金賞を受賞したモンゴルの「テンゲル・アヤルグー」を招聘し、11月に全国12都市でコンサートを開催します。

熟練の音楽家たちが繰り広げる緻密なアンサンブルは、聴く人をまるで広大な草原へと誘うようです。プログラムには、大自然や動物を主題にした楽曲やモンゴルの映画のためにテンゲル・アヤルグーのメンバーが作曲した曲に加え、「トルコ行進曲」や「カルメン・ファンタジー」といった馴染み深いクラシック曲も。美しくどこか懐かしさも感じるその響きを、ぜひ会場でご堪能ください。

テンゲル・アヤルグー

TENGER AYALGUU, Mongolian traditional band

テンゲル・アヤルグーは1997年にモンゴル国立文化芸術大学の生徒と卒業生によって結成されたモンゴルの民族音楽五重奏団であり、古代文字に記録されたモンゴルの伝統的な民族芸術の保存と普及の活動を行っています。結成以来、日本、韓国、台湾、ロシア、ハンガリー、フィンランド、イタリア、そしてアメリカなどの国々で演奏活動を行い、国際的な音楽祭やコンクールで受賞経験があります。また、アルバム、ミュージックビデオをリリースし、楽曲編曲に関する書籍も出版しています。メンバーの多くは大学教授であり、コンサートでの演奏だけではなく、研究活動にも従事しています。



※三重、愛知は独自のプログラムを予定しています。

最新情報は日本室内楽振興財団ウェブサイトでご確認ください。

全国スケジュール

日時	日時	公演地	会場	プログラム
11/5 (水)	19:00	富山	富山県高岡文化ホール 大ホール	A
11/7 (金)	18:00	大分	くにさき総合文化センター(アストくにさき)	A
11/8 (土)	16:00	熊本	益城町文化会館	A
11/9 (日)	14:00	宮崎	小林市文化会館 小ホール	A
11/11 (火)	14:00	広島	庄原市民会館	A
11/13 (木)	19:00	鳥取	鳥取市民会館	A
11/17 (月)	19:00	大阪	住友生命いずみホール	B
11/19 (水)	11:30	三重	三重県文化会館 大ホール	特別プログラム
11/20 (木)	14:00	愛知	宗次ホール	特別プログラム
11/22 (土)	14:00	静岡	沼津市民文化センター 小ホール	B
11/23 (日)	14:00	神奈川	横浜市港南区民文化センター「ひまわりの郷」ホール	A
11/24 (月・休)	14:00	東京	TOPPANホール	B

プログラムA

E.チャイコフ：美しきモンゴル
モンゴル民族長唄：山について
TS.ブレブフー：馬頭琴について
TS.ツェベグスレン：粘土笛の曲
N.ジャンツァンノロブ：ホーミー
TS.ナツァグドルジ：ゴビの朝・らくだレースについて
B.アルタンゲレル：故郷について
N.ジュルメドルジ：モンゴル全国について
W.A.モーツァルト：トルコ行進曲
J.メンダマル：モンゴル人の男
作者不明：アルタイ山脈讃美歌

プログラムB

テンゲル・アヤルグー：古代モンゴル史
モンゴル民族長唄：モンゴル生活について
TS.スフバートル：物語の早馬について
E.Di.カプア：オー・ソレ・ミオ
SH.ウルジーバヤル：競馬の早馬について
P.ブヤンジャルガル：春について
J.ビゼー / F.ボルヌ：カルメン・ファンタジー
KH.アルタンゲレル：ふるさとへ逃げ帰る馬について
作者不明：アルタイ山脈讃美歌

※三重、愛知は独自のプログラムを予定しています。

調査研究事業

こどもクラシック ミュージックアトリエ

vol.08

主催事業レポート



2025.8/14(木) ①11:00-12:00 参加者 22組58名 ②14:30-15:30 参加者 23組63名

住友生命いずみホール

対象：小学4～6年生とその保護者 料金：無料(事前応募によるご招待)

出演：カルテット・アトリエ(ヴァイオリン：上敷領 藍子・相原 瞳、ヴィオラ：後藤 彩子、チェロ：佐藤 響)

主催：公益財団法人 日本室内楽振興財団、住友生命いずみホール(一般財団法人 住友生命福祉文化財団)

後援：読売テレビ、大阪市

演奏曲

ハイドン：弦楽四重奏曲 op.76-3「皇帝」

メンデルスゾーン：弦楽四重奏曲 第1番 op.12

「こどもクラシック ミュージックアトリエ」は、調査研究事業「子ども向け音楽プログラム開発」の研究の一環として、2022年より住友生命いずみホール(一般財団法人 住友生命福祉文化財団)と共同で実施しています。8回目の今回は、夏休みの自由研究の題材にもぴったりな「コンサートができるまで」というテーマで開催しました。

今回は舞台の上に座席を設け、息の合ったカルテット・アトリエの美しい演奏をすぐ近くでお届け。さらに、控室、搬入エレベーター、ピアノ庫など、ホール内の普段は立ち入ることがない場所を見てもら

いながら、コンサートの裏側にある様々な職種をご紹介します。照明や音響、ステージマネージャー、チケットセンタースタッフ、デザイナー、レセプションистや清掃員といった多岐にわたる業務がコンサートの開催を支えていることを、子どもたちに知ってもらうことができました。

さらに、ハイドン「皇帝」の第二楽章をホールの最前列と最後列の座席で聴き比べるという時間も。普通の演奏会ではなかなかできないこうした体験を通じて、クラシック音楽やコンサートホールにさらに興味を持ってもらえたらと思っています。



開演前、終演後はロビーでヴァイオリンとチェロの体験を実施！子どもたちの真剣なまなざしが印象的でした。



照明スタッフの操作で一瞬暗くなったホール。アーティストが演奏しやすく、お客さんからは舞台上がよく見えるように、照明スタッフはいつも細かい調整をしています。



いずみホールのピアノ庫には、皆が知っているピアノだけでなく、チェンバロやフォルテピアノも。この部屋は24時間空調管理されています。

お客様の声(アンケートより抜粋)

- ♪子どもに本物の体験を！と申し込みにしたが、親の私もとても感動しました。優しく響く生の演奏が心に染みました。
- ♪特に搬入用のエレベーターの大きさや、ピアノ庫のチェンバロに興味がありました。
- ♪ステージの上とはいえずっと座って話を聞いていると飽きてしまう子供達向けに、場所を変えながら違ったアプローチでお話をされていたのが良かったです。
- ♪バイオリンに実際に触らせてもらって、弾き方を教わったことが凄く楽しかったと言っていました。

次回予告

事前応募・招待制

こどもクラシック ミュージックアトリエ

vol.09

2026.2月 2回公演予定 住友生命いずみホール

対象・応募方法等の詳細は決定次第、日本室内楽振興財団ウェブサイトやメールマガジンでお知らせします。

知ってた？ コンサートを支える仕事の秘密

・舞台を監督するステージマネージャー

ステージマネージャーが舞台上に設置する譜面台は、通常は高さ調整用のネジがすべて演奏者の右手側にくるようにしています。右利きの演奏者がすぐに調整できるようにするための、細やかな配慮です。

・オーケストラを率いる指揮者

いずみホールの指揮者控室はステージのすぐ裏にあり、舞台へはわずか40歩。緊張感を保ったまま、すぐに本番へ臨める環境です。

・ピカピカのホールを維持する清掃員

ホール内をきれいにし、気持ちの良い環境を整えるプロフェッショナル。いずみホールでは、公演のある日は開場前・休憩前・終了後の3回もお手洗い清掃が入るそう。

モンゴルの民族楽器

広大な草原地帯に響く様々な音色。
歴史と共に培われた楽器たち

13世紀にはチンギス・ハンにより、アジアからヨーロッパにまたがる「モンゴル帝国」が作られた。その時代から楽器も音楽も固有のものがあつたに違いないが、詳細は分からない。いま使われている楽器からその歴史を探ってみよう。

構成・文／片桐卓也

1956年福島県生まれ。大学在学中からフリーランスの編集者&ライターとして活動始める。1990年頃から本格的にクラシック音楽の取材・執筆を始め、現在はクラシック音楽専門誌などに、演奏家のインタビューや、コンサートの批評などを書いている。好きな音楽ジャンルはバロック時代の音楽とジャズ。

馬頭琴 (モリンホール)

弦の数が2本で、木製の胴体(四角形の共鳴箱)に長い棹の部分が付けた構造をしている。中国で言えば二胡にあたるような楽器である。ただ、その名前から分かるように、棹の部分の先端が馬の頭部の装飾となっている。それは馬という生き物とモンゴル民族の長い共生関係を象徴的に示すものだ。胴体の部分は単に木のボディだけでなく、以前はそこに蛇の皮やヤギ、ラクダなどの皮を貼っていた時代もあったが、1960年代にソ連の楽器職人の指導でそれをやめ、木製の表板を使うようになったようだ。音色としてはチェロに近く、チェロの世界的演奏家ヨーヨー・マが以前に弾いたこともあった。弦と弓は馬の尾の毛とナイロンをより合わせたものを使う。



バス馬頭琴 (イフホール)

馬頭琴のなかでも最も大きな楽器がバス馬頭琴で、西洋楽器で言えばコントラバスにあたる低音弦楽器。基本的には馬頭琴と同じように、四角い共鳴箱に棹を付け、そこに2本の弦を張って、弓で演奏する。音程を変える時のテクニックはコントラバスとはちょっと違って、指板に弦を押さえつけてから弾くのではなく、左手の指先で弦を軽く押さえてから弾くというテクニックが伝統的なものらしい。先頃、天皇皇后両陛下がモンゴルを訪問された際、天皇陛下がモンゴル国立馬頭琴交響楽団と共演されたが、その時にも、このバス馬頭琴の演奏がちらっと映っていた。2本の弦だけの楽器のオーケストラはとても興味深いものだと感じた。



ヨーチン(揚琴)

台形の広い板にたくさんの弦を張って、それを棒で叩いて音を出すという楽器は、東アジアから中央アジアに広く分布する楽器であり、ハンガリーで使われるツィンパロムもその仲間ということが出来るだろう。モンゴルでは「ヨーチン」と呼ばれ、様々な楽器のアンサンブルの時に使われている。基本的には中国の揚琴と同じように、台形の木製の共鳴箱の上に、たくさんの弦を張り(150本という説もあり)、専用のバチで叩いて音を出す。弦の数が多く、西洋楽器のように12音階を出すこともできる訳で、様々な音楽に対応出来るという点でも新しさを感じさせる楽器である。楽器によっては消音ペダルもついている。



リンベ(モンゴルの笛)

笛は草原の生活には欠かせないものだったに違いない。遠くにいる友人を呼ぶ時や、馬たちを集める時などに使われていたはずだ。リンベと呼ばれるモンゴルの笛は、もともとは動物の骨と銅で作られていた。現在ではボディはプラスチック、銅、真鍮など、様々な種類があり、演奏者が自分で作ることもあるようだ。一番上に息を吹き込む穴があり、ボディには6つの指穴、さらにその下に2つの穴があるのが標準的な形だ。主にモンゴルの伝統的な歌であるオルティンドーの伴奏のために使われる楽器で、その歌に合わせて息継ぎをしないで吹くこともあるという。その時は特殊な循環呼吸というクラシック音楽でも使われるテクニックを使う。



エベルブルー(角笛)

モンゴルの角笛である。モンゴル語で「エベル」は角、「プレー」は笛を意味するというので、この名前が付けられている。西洋ではそれが進化してホルンなどになった訳だが、モンゴルではそれが現在の「エベルプレー」になったという訳だ。形はまさに動物の角のようにクルッと丸くなっており、そこに吹き口や穴、その穴をふさぐ金属製のアタッチメントが付けられていて、かなり時代と共に進化して来たことを感じさせる。それはまさにホルンとも同じだろう。音もかなり独特。それは実演を聴いていただければわかるはずだ。11月に日本を訪れる「テンゲル・アヤルグー」の公演をぜひ聴きに行ってください。



ヤトガ(モンゴル琴)

モンゴルでは2000年前から琴が使われていたと言い、歴史を振り返ると32種類の琴があつたとされている。現在はその歴史を引き継ぐ楽器としてこの「ヤトガ」が使われているけれど、弦の数は5弦、13弦、18弦、21弦の4種類となっている。演奏法の特徴としては、日本の琴のように爪に<琴爪>をつけて弾くのではなく、指で直接、弦を弾くというのが特徴となっている。また奏者が直接、膝の上に乗せて弾くこともあり、他の国の琴とはかなり違う。馬頭琴の演奏の伴奏にも使われる他、ヤトガの独奏曲もあり、古くは12本の絹の糸を弦に使用して宮廷で演奏されていたというから、かなり優雅で繊細な音がしたのだろう。



トプショール(弦楽器)

馬頭琴が弦を弓で弾く楽器であつたのに対して、このトプショールは一種のギターのような演奏法を取っている。丸い形のボディに棹を付け、そこに2本の弦を張る、という点は馬頭琴と同じだが、それをギターのように抱えて、指で弦を弾きながら音を出す。楽器によって個性があり、棹の頭部の飾りが白鳥の頭を模したものがあるし、お椀の形をしたものもあると言う。モンゴルでは歌も非常に盛んで、古代から様々な歌や、物語を歌うスタイルの作品もあつたようだが、現在でもホーミー(喉歌)という独特の歌い方が残っている。その伴奏に使われる楽器でもあり、フォークギターのような存在であるとも言えるだろう。



こういう場所で聴ける

交流も増えて来た
モンゴルと日本。その音楽も
次第に身近な存在に

最近ではモンゴルとの交流が増えて来た。それは大相撲でモンゴル出身の力士たちが大活躍していることも影響している。日本人でモンゴルに行つて馬頭琴の演奏を学ぶ人も出ていて、日本各地にモンゴル料理のお店などもあり、そうした場所でも食事しながら馬頭琴の演奏を楽しむ場所もあるようだ。ただ、大きな規模の演奏団体の公演や来日はかなり少ないので、その公演のお知らせなどを見かけたらチェックして頂きたい。令和4年には「モンゴル国立馬頭琴交響楽団」の公演が日本でも行われたことがある。

より小さな編成の楽団の公演は、かなり小規模なため、例えばお近くのモンゴル料理店などを覗いてみて、ご飯を食べながら、そこで直接、様々な情報を仕入れてみるという冒険が必要かもしれない。WEB上には日本人で馬頭琴の演奏をしている方の情報なども散見されるので、そうした人に直接あたってみるのも、このSNS全盛時代には情報収集に役立つはず。ちなみに筆者は大阪にある素敵な雰囲気のあるモンゴル料理店を発見した。また、モンゴル音楽そのもの(特にホーミーなど)を教えるところ、教室もあるようなので、興味のある方はぜひ、無料体験レッスンなどを受けてみてはいかがだろうか？

プロデューサーが往く！
世界の室内楽の現在

北欧の弦楽四重奏団が優勝！ ボルドー弦楽四重奏コンクール

河井 拓（大阪国際室内楽コンクール&フェスタ 総合プロデューサー）



プロフェッショナル・コミッティと審査委員とファイナリストたち

例年にも増して国際色が豊かになったボルドー国際弦楽四重奏コンクール。参加団体のバックグラウンドも多彩になり、各国での室内楽トレーニングの多様化もうかがえる。若手弦楽四重奏団の最前線を現地からレポート。



ファイナリスト3団体 左からOpus13、Arete、Terra

ワインだけではなく、ボルドーの街
ブドウの花が咲き始める5月、最適な気候の時期にボルドーに再び足を運んだ。
ボルドーと聞いて、お酒を嗜む大人なら（いや、飲まない方でも）真っ先に思い浮かべるのはワインだろう。しかしこの町は商都としての歴史も長く、文化の発信地としての機能も果たしてきた。
ボルドーはガロンヌ川の水運によって古代から交易地として栄えてきた。鉄道網が張り巡らされるまでは交通の要衝でもあり、普仏戦争や二度の世界大戦時には、敵国が迫るパリから首都機能が移転されてきたこともある。中心に位置する旧市街地には1700年代の街並みが綺麗に保存されていて、街自体が世界遺産にも認定されている。1780年に建設された大劇場では（この内装はパリのオペラ座建設時にも参考にされた）、華美なオペラなどが上演されて、ヨーロッパの文化の中心都市の一つとして栄えてきた。

そのような歴史もあつたが、ボルドーでは1999年からエヴィアンのコンクールを引き継ぐ形で弦楽四重奏コンクールが3年ごとに開催されている。グローバルキャリアを目指す若手団体への数少ないチャンスであり、これまでにブラジャークQ、ハーゲンQ、イザイQ、ベルチャQ、エベヌQ、シューマンQ、レオンコロQなど、室内楽界の第一線で活躍するクアルテットを輩出してきた。今では、フランスの室内楽マーケットに参入するための、確固たる登竜門となっている。

長らくチェリストのアラン・ムニエが主導してきたが、2021年からはフランスを代表

愉しむことができた。

またコンクール期間中には会場ロビーで、弦楽器製作者によるヴァイオリン作りの公開ワークショップも行われていて、最終日には新しく組み立てた楽器を、審査委員長

コンクール後のキャリアも見据えて

コンクールのファイナルラウンドの課題曲は、チェコの作曲家クリストフ・マラッカハの委嘱新作「アメデア」、モーツァルト作品、そしてベートーヴェン又はシューベルトという、90分近くなる長大なプログラム。最後まで根気が試される課題曲構成である。

「アメデア」は画家モディリアーニの作品に魅了されて創作した楽曲。作曲家自身の信条に基づいて、ギリシャ時代のメロデーから、様々な時代のサウンドが散りばめられた魅力的な音楽だった。

モーツァルトの作品では、ファイナルに残った3団体の響きの作りが顕著に分かれたのが印象的だった。韓国からのArete Qは1次のハイドンと同様に軽く自由闊達な表情を見れば、ノルウェー・スウェーデンのOpus 13は盤石な中低音を基盤とする安定した構成を聴かせ、アメリカのTerra Qはバランスの良い流麗なサウンドを響かせた。

審査はOpus 13が1位、Terra Qが2位、Arete Qが3位という結果になった。1位と2位は、4月に開催されたウィグモアホールコンクールと同じで、両団体の卓越性が裏付けられることになった。

今回のコンクールでは「プロフェッショナル・コミッティ」として、世界の室内楽業界のプロ

するモディリアーニQが音楽監督として、コンクールと、間の年に開催されるフェスティバルを牽引している（モディリアーニのメンバーは、今ではボルドーに居を構えている）。
第11回ボルドー国際弦楽四重奏コンクール
2025年のコンクールでは世界中から33団体の応募があり、予備審査を経て10団体（イギリス1、オランダ1、韓国1、韓国+ドイツ1、ドイツ1、フランス3、ノルウェー+スウェーデン1、アメリカ）が選出された。（※ただしイギリスのクレイオQは出場キャンセル。）

5月19日から24日にかけて開催された本審査はマーティン・ビーヴァー委員長（元東京Q）を筆頭に、コリーナ・ベルチャ（ベルチャQ）、エレヌ・クレマン（元ドリックQ）、ミゲル・タシルバ（元イザイQ）、ヴァレンティン・エルベン（元アルバン・ベルクQ）、アンナ・ケフレック（ピアニスト）が務める。いずれも室内楽界の第一人者であり、審査結果に関わらず、演奏が認められれば次へのチャンスを提供してくれる可能性もあり、コンテスタントにとっては彼らの前で演奏できること自体が好機ともいえる。

審査委員6人の中に、大阪国際室内楽コンクール優勝団体関係者が2人も入っているのは、我々としてはとても頼もしい限りである。

無料で開放されるコンサートホールの客席が地元音楽愛好家で賑わう中、コンテスタントの熱のこもった演奏が繰り広げられる。1次ラウンドは、シューベルトの第12番「四重奏断章」、ハイドン作品の第1楽章、

デューサーなど約20人が招かれ、ファイナルラウンド鑑賞の翌日にファイナリストと弦楽四重奏のキャリアについてディスカッションする機会が設けられた。（筆者も大阪のプロデューサーとして、コミッティの末席に名を連ねていた。）

ディスカッションではレパトリーの独自性の出し方や、各エリアのマーケットでのキャリアの作り方など、多岐にわたってファイナリストの将来を応援する話で盛り上がった。

Opus 13は来年の6月に日本ツアーが予定されていて、6月27日には大阪のザ・フェニックスホールでも出演予定である。コンクールからさらに磨きのかかった熟演を期待できるだろう。第1ヴァイオリンのSoren Mian Waideは母親が日本人という日本に所縁のある団体なので、是非とも日本でもキャリアを築いてほしい。

韓国のArete Qが3位に入賞したように、近年は韓国人による弦楽四重奏の活躍が目立ってきた。彼らは欧米の音楽機関で学び、フルタイムの室内楽キャリアを目指して目覚ましい演奏を届けてくれる。しかし日本を含めて、アジアでは彼らが室内楽を生業としていけるマーケットが成熟しているとは言い難い。彼らがアジア地域に戻ってきた際に、室内楽を継続していけるような土壌作りも必要とされるだろう。



極めて高い水準の演奏を披露したOpus13



審査委員コンサートでは世界クラスのアーティストが共演



子ども向けのフィルムコンサート



ホールのロビーで行われる楽器製作ワークショップ

製作された楽器は最後に審査委員長が試奏

そしてロマン派作品か近代作品から選択。必須課題曲のシューベルトでは、同じ作品で否応なしに直接比較されるので、演奏団体の緊張も一層張りつめているだろう。変わってハイドンでは近年は自由な解釈が広がってきているようで、様々な表情の古典派を楽しむことができた。

本コンクールの課題曲の大きな特徴は、セミファイナルに共演課題曲が含まれていることだろう。今回はヴァイオリナ奏者を加えてメンデルスゾーンの弦楽五重奏曲第1番の第1楽章。クアルテット内で緻密に作りこんでくる団体もあれば、共演者が自由に弾くことの出来る余裕を残す団体もあり、ここが評価のポイントになるのか興味深いところである。他の課題曲は、ロマン派作品か近代作品から選択（1次で選択しなかった方）と、10-15分の自由選択曲。この自由選択曲ではベートーヴェンの「大フーガ」やヴィドマンの「狩り」弦楽四重奏など、バラエティ豊かな

選曲を見せて、近年の若手団体のレパトリーの豊富さを示した。

審査以外にも室内楽の魅力を発信

ボルドーでは「コンクール&フェスティバル」と銘打っており、ワイン樽庫内などでの審査委員やディレクターによる特別コンサート、子ども向けのフィルムコンサート、病院や医療施設などへの出張コンサートなどが幅広く展開されている。コンクールの間の年に開催されているマスタークラスに参加した若手団体への演奏機会提供にもなっており、継続的な若手音楽家支援プログラムが有機的に展開されていることがうかがえる。

審査委員によるコンサートでは、老匠ヴァレンティン・エルベンによる味わい深いフォーレに始まり、現代を代表する第一線の室内楽奏者による火花が飛び散るような掛け合いのモーツァルト、シユトラウス、シユーマンを



ラヴェル邸近くのランブイエの森

Joseph Maurice Ravel

ラヴェルとモンフォール＝ラモリ

わけがありませんよね。そう、ラヴェルは7年をかけて自ら増築や改築を行いました。まさに*DIYです。エンジニアの父譲りなのか、最新技術を自宅に投入します。まず電話線を引き、いつでも電話できるようにしました。そして寒い冬に、家のどこにいても快適に過ごせるように中央暖房も導入しました。さらには、いつでも新鮮で美味しい食材を食べられるように冷蔵庫も購入。他にも、空いた時間にはさまざまな情報を

得るためにラジオや無線機も設置。100年ほど前の出来事なのに、現代で営んでいる私たちの生活とさほど変わりありません。もちろん当時としてはかなり最先端を行く技術を取り込んだ暮らしでした。

ラヴェルの家は 小さな万国博覧会

家の中は最新の技術で埋め尽くされていましたが、それだけでラヴェ



書庫。浮世絵や着物を着た女性の置物があります。左手前には、中央暖房も。

ルは満足しませんでした。もちろんですが、壁紙やカーテン、そして床の柄にもこだわりを発揮し、気に入った壁紙が見つからなければ自分で塗っていました(しかも模様付き)。そして部屋の中は、異国の芸術作品や置物に埋め尽くされていました。確かに、ラヴェルの作品を思い返すと、ラグタイムや中国風の音楽が取り込まれている《子供と魔法》、マレーシアの韻律を用いた《ピアノ三重奏曲》、そして歌曲にはギリシアやイスラエルの音楽を元にしたものがあります。それを象徴するかのように、中国磁器、ガネーシャや仏陀の置物、シーシャ、アフリカの不思議な木製の仮面などがひしめいていました。

中でも目を引くのが、膨大な浮世絵です。ラヴェルは14歳の時に行った第4回パリ万博(1889年)で、数多くのアジア文化に触れましたが、浮世絵をはじめとする日本文化にも大変大きな興味を示しました。その後は、パリで売られている浮世絵を見つけては購入し、家に飾っていたそうですが、あまりの数に筆者も驚きました。1925年には、自らの要望で日本の長唄を聴いた記録が残っており、薩摩治郎八という日本人も、「ラヴェルは日本の音楽にも精通していた」と証言していることから、日本に対して相当な興味があったことが伺えます。その興味がさらに垣間見えるのが、モンフォール＝ラモリの家の庭です。ラヴェルは、この家の

「スイスの時計職人」と称されるほど緻密なオーケストレーションを誇ったラヴェルは、その几帳面さを私生活にも貫き、自邸の隅々にまで美と秩序を刻み込みました。

母の死をきっかけに 実家を出て初めて住んだ家

1875年、母マリーの故郷である南西フランス(バスク地方)の小さな港町シブールで生まれたラヴェル。生後すぐに家族がパリへ移住してから、芸術と音楽に囲まれた都会的な感性を育んでいきました。父ジョゼフはエンジニアとして活躍し

た人物で、その教養を惜しみなく息子へ授けました。幼い頃から通っているピアノや作曲のレッスンでは「非常に怠惰な生徒」で、教師達は頭を抱えていたそうですが、その代わり自分の興味の赴く分野には時間を忘れるほど熱中しており、両親はこのような息子に対して大変寛容でした。両親のこの姿勢があつてこそ、ラヴェルは周囲に流されない、自らの美学とこ

だわりを貫く作曲家へと成長したのかもしれない。



ラヴェルのピアノ(エーラル)

その後の学生時代や、作曲家としての歩みを始めた時期は必ずしも成功ばかりではなく、ローマ賞に何度も落選し、批評家からは激しい批判を浴び、作品もなかなか再演されないなど、どちらかというと辛酸をなめた経験の方が

やっと見つけた 一人暮らしの家

多いのではないのでしょうか。そんな中勃発した第一次世界大戦では、母国のためにフランス軍に従軍するのですが、1917年に大好きだった母が死去。すでに亡くなった父(1908年没)のいない実家に母だけを残すのは気が引けたラヴェルは、それまで実家を離れることなく暮らしていました。しかし母の死後、しばらく友人の家で居候を続けながら、一人暮らしのための家探しをします。

そして1921年、パリから少々離れた田舎町モンフォール＝ラモリの家を購入します。当時46歳でしたが、これがラヴェルにとって初めての一人暮らしでした。ランブイエの森に囲まれたとても小さな町(というか村)でしたが、パリへ出るにも不便ではなく、ラヴェルが探していた条件にはびつたりだったのです。しかし、新築ではなく、あまりきれいとも言えなかった家でした。ですが、考えてみてください。音楽にはとことんこだわり、独特の美学を持ったラヴェルが、自分の住む家にこだわらない



日本風庭園

持つ広い庭を、日本庭園を元にデザインしたのです。用事でパリへ行くたびに園芸店に立ち寄り、日本風庭園に似合う植物を持つて帰り、自ら植えていました。そして木も自分で剪定し、日本風にアレンジしていま

*Do It Yourself=業者に頼らず、自分で作り、修理すること

大井 駿 (文&写真)

指揮者、ピアニスト、古楽器奏者。1993年、東京都出身。第1回ひろしま国際指揮者コンクールにて優勝。第21回ハチャトゥリアン国際コンクール指揮部門第2位、古典派交響曲ベストパフォーマンス受賞。パリ、ミュンヘン、ウィーン、ザルツブルク、バーゼルにて、ピアノと指揮と古楽を学ぶ。読売日本交響楽団、東京都交響楽団、広島交響楽団、モーツァルテウム管弦楽団等と共演。

名曲

第5回

誕生!

Wolfgang Amadeus Mozart

嫌いな楽器のために書いた？ モーツァルトの フルート四重奏曲

「モーツァルトはフルートが嫌いだった」という話をどこかで耳にしたことがあるのではないだろうか。
それにしてもフルート四重奏曲の出来ばえがよすぎるのでは。
嫌いな楽器のためにここまで書けるもの？

飯尾 洋一（音楽ライター）

著書に『クラシックBOOK この一冊で読んで聴いて10倍楽しめる!』新装版（三笠書房）、『クラシック音楽のトリセツ』（SB新書）、『マンガで教養 やさしいクラシック』監修（朝日新聞出版）他。テレビ朝日「題名のない音楽会」音楽アドバイザーなど放送の分野でも活動する。

フルートが嫌いだから
仕事が遅れたという言い訳

通説によれば、モーツァルトはフルートが嫌いだったということになっている。なぜなら、本人が手紙にそう書いているからだ。モーツァルトは父レオポルトに宛てた1778年2月14日の手紙に、「この存じの通り、ぼくはがまんできない楽器（フルート）のために曲を書き続けようとする、たちまち気分が乗らなくなります」と記している。

しかし、この話題を耳にするたびに、困惑するモーツァルト・ファンは少なくないのではないだろうか。だって、おかしいでしょ。モーツァルトがフルートのためにどんな曲を書いたか。フルート四重奏曲を4曲、フルート協奏曲第1番（第2番はオーボエ協奏曲からの編曲）、フルートとハープのための協奏曲。とびきりの名曲ばかりだ。交響曲のなかでフルートが重要な役割を果たす

ことも少なくない。他の楽器、たとえばオーボエやクラリネット、ホルンなどと比べて、フルートが冷遇されているかといえば、ぜんぜんそんなことはないはず。嫌いな楽器のために、こんなにもインスピレーションが湧くものだろうか。

件の手紙については、その背景も考慮する必要がある。マンハイムを訪れていたモーツァルトは、裕福なフルート愛好家フェルディナント・ドジャンから、まとまった量の作曲仕事を依頼されていたのだが、ぐずぐずしているうちにドジャンがパリに発つことになってしまった。手紙にはドジャンのために2つの協奏曲と3つの四重奏曲しか渡せなかったため、約束の半額ほどの96フローリンしか支払ってくれなかったと書かれている。そして、父親に対して、ありきたりな愚痴をこぼしている。

「全部を仕上げられなかったのは当然でしょう。ここでは落ち着いて作曲する時間があり

ません。夜しか書けないのです。いつでも作曲する気分になれるわけはありません。一日中ただ書き続けることだってできますが、作品は自分の名で世に出るものですから、恥ずかしいものにはしたくありません」

こう書いた後に、前述のように嫌いなフルートの作曲には気分が乗らなくなるという話が続く。言ってみれば、書けなかった言い訳のダメ押しとしてフルート嫌いを持ち出しているのだ。思ったほどの収入が得られなかったことに対して父親が怒るかもしれないから、あまり叱られないようにその場しのぎの釈明をしているだけにも見える。モーツァルトはこの時点で22歳。この年齢の若者が自分の父親にどれほど正直にものを言うだろうか。

それに、仮にその時点で本当にフルートが嫌いだったとしても、人の好みは経験や年齢でどんどん変わるもの。子ども

もの頃は嫌いだった物が、大人になったら好きになった、なんてことはいくらでもある。一時の手紙の記述にどこまで重きを置くかは考えものだろう。

ドジャンのために
書いた曲はどれ？

さて、父への手紙からは3曲のフルート四重奏曲が書かれたことが読み取れるが、これらがすべて残っているのかどうかはわからない。モーツァルトには4曲のフルート四重奏曲があるが、どれがドジャンのための曲となると、諸説あつて判然としないのだ。

いちばん有名な第1番（長調は、ドジャンのために書いた曲とみなされている。この曲はとびきりの名曲だ。第2楽章の寂寞としたアダージョから第3楽章のロンドへと移行する瞬間は大空に向かって羽ばたくような解放感があつて、いつ聴いても神がかつていると思う。

第2番（長調はドジャンのための曲かもしれないが、詳細はよくわからない。アンダンテとメヌエットの2つの楽章しかない点是不自然に思える。奇妙なことに、出版時には第1番の第1楽章を冒頭に置いた3楽章の曲にされていたというから、なにやら「ワケあり」といった様子である。本来は他の楽章があつたのかも。

第3番（長調もかつてはドジャンのための曲と言われてきたが、どうやらもつと後のウィーン時代に書かれたのではないかという説が有力のようだ。この曲も2つの楽章しかなく、第2楽章は1784年完成の「グラン・パルティータ」第6楽章の編曲のようだ。第4番（長調は1786年頃にウィーンで書かれたと推定されている。第3楽章に当時のウィーンでヒットしたメロディが使われているので、ドジャンよりずっと後の時代の曲であることはほぼ確実だ。ウィーン時代に交流の

あつたフルート奏者のために書かれたと考えるのが自然だろう。

しかし、こうして4曲を眺めてみると、結局、ドジャンのために書いたのは第1番だけではないかと思えてくる。こうなってくると、もはやモーツァルトの手紙は叙述トリックを用いたミステリーのような様相を帯びてくる。いわゆる「信頼できない語り手」というやつだ。モーツァルトは本当にフルート四重奏曲を3曲ドジャンに渡したのか。実は1曲しか書いていなかったのか。それともその1曲すら、はたしてドジャンのために書いたのかどうか。だいたいドジャンとは実在したのか？ 父親への手紙に書いたことはなにかなにまで出まかせだったらしい……。

疑い出すとキリがない。まちがひなく言えるのは、フルート四重奏曲第1番が奇跡のような名曲であるということくらいのものである。

モーツァルト：フルート四重奏曲集

Ars Produktion

カレル・ヴァルター（フラウト・トラヴェルソ）、パブロ・パレットティ（ヴァイオリン）
ピーター・ピアリー（ヴィオラ）、ベトル・スカルカ（チェロ）

ピリオド楽器を用いた近年の録音を選ぶならこのアルバム。カレル・ヴァルターのフルート（フラウト・トラヴェルソ）が実に雄弁で異彩を放つ。横に流麗に流れるというよりは、縦に楔を打ち込むような脈動するモーツァルト。生命力にあふれている。奏者は古楽アンサンブル、カフェ・ツィマーマンのメンバーが中心となっている。モーツァルトの音楽が持つ光と影を丹念に描き分ける。

Spotifyなど、
ストリーミングサービスで
も聴けます！



おすすめ
音源

■ 2025 (令和7) 年度 第1回理事会

開催：2025年6月6日(金) ホテルニューオータニ大阪
承認事項：① 2024 (令和6) 年度事業報告書及び決算報告書
② 2025 (令和7) 年度定時評議員会の招集と議題
③ 事務局長選任

報告事項：第12回大阪国際室内楽コンクール&フェスタ実施概要と、
会長・理事長・常務理事の職務執行状況

■ 2025 (令和7) 年度 定時評議員会

開催：2025年6月24日(火) ホテルニューオータニ大阪
承認事項：① 2024 (令和6) 年度事業報告書及び決算報告書
② 評議員2名の辞任と評議員1名の選任
③ 理事3名と監事1名の辞任と、理事3名と監事1名の選任

新任評議員：廣橋陽一(ハウス食品グループ本社)

新任理事：音居哲也(西日本旅客鉄道)、

伊藤文雄(日本室内楽振興財団)、

山内隆行(日本室内楽振興財団)

新任監事：谷 和男(読売テレビ放送)

報告事項：事務局長承認と

第12回大阪国際室内楽コンクール&フェスタ実施概要

公益財団法人 日本室内楽振興財団 支援企業

大阪ガス株式会社	住友生命保険相互会社	カナデピア株式会社	非破壊検査株式会社	株式会社JTB
関西電力株式会社	大樹生命保険株式会社	川崎重工業株式会社		株式会社電通
	東京海上日動火災保険株式会社	株式会社クボタ	大塚製薬株式会社	株式会社ニュー・オータニ
住友電気工業株式会社	日本生命保険相互会社	ダイキン工業株式会社	住友化学株式会社	
ソニーグループ株式会社		日本製鉄株式会社	積水化学工業株式会社	KDDI株式会社
株式会社東芝	野村證券株式会社	三菱重工業株式会社	武田薬品工業株式会社	NTT西日本株式会社
日本電気株式会社			日本ペイント株式会社	
パナソニック ホールディングス株式会社	アサヒビール株式会社	株式会社日建設計		株式会社読売新聞大阪本社
株式会社日立製作所	サントリーホールディングス株式会社		近畿日本鉄道株式会社	株式会社読売新聞東京本社
富士通株式会社	ハウス食品グループ本社株式会社	株式会社大林組	京阪電気鉄道株式会社	日本テレビ放送網株式会社
ローム株式会社		鹿島建設株式会社	南海電気鉄道株式会社	読売テレビ放送株式会社
	東洋紡株式会社	株式会社きんでん	西日本旅客鉄道株式会社	
株式会社関西みらい銀行	株式会社ワコール	株式会社鴻池組	阪急電鉄株式会社	(関連業種別 五十音順)
株式会社みずほ銀行		清水建設株式会社	阪神電気鉄道株式会社	
株式会社三井住友銀行	伊藤忠商事株式会社	大成建設株式会社		
三井住友信託銀行株式会社	岩谷産業株式会社	大和ハウス工業株式会社		
株式会社三菱UFJ銀行	株式会社千趣会	株式会社竹中工務店		
株式会社りそな銀行	三菱商事株式会社			

編集・発行／公益財団法人 日本室内楽振興財団

〒540-8510 大阪市中央区城見1丁目3-50 TEL.06-6947-2183 FAX.06-6947-2198 https://jcmf.or.jp Vol.64 令和7年10月1日 表紙・9-10Pイラスト：Mié 協力：高坂はる香

編集後記

今回の奏は、モンゴル伝統楽団テンゲル・アヤルグーの来日に合わせたモンゴル特集です。表紙はモンゴルに関係するモチーフをMiéさんに描き下ろしていただきました!楽器は表紙左から、馬頭琴・エベルプレーン・口琴。お菓子は表紙上がアロール、裏表紙上がオルポー、下がボールツォグ。お茶はスーデーツァイという塩味のミルクティー。青いお花はスカピオサ・コマサというモンゴルの国花です。

■ 2026 (令和8) 年度 助成金募集について

2026年度の助成金交付事業の募集は2025年10月31日(金)をもって締め切らせていただきます。申請されたものについては2026年1月に開催を予定している選考委員会で審議いたします。なお2027年度の助成金募集については2026年秋に実施する予定です。

お問い合わせ：公益財団法人 日本室内楽振興財団

電話 06-6947-2183

ウェブサイト https://jcmf.or.jp



2026年5月に開催! 第12回大阪国際室内楽コンクール&フェスタ

2025年10月12日(日)まで参加団体を募集中。予備審査を経て、2026年3月に出場団体を発表します。どんな団体が集うのかお楽しみに!



クラシック音楽のみならず伝統音楽や民族音楽など幅広いジャンルを対象としている大阪国際室内楽フェスタは、音楽を愛する一般の方に審査員を務めていただいています(事前応募による抽選制となります)。2025年11月ごろ審査員募集を開始する予定です。最新情報は財団のウェブサイトやSNS、メールマガジンでお知らせします。

7年ぶりに開催

第5回宗次ホール弦楽四重奏コンクール

国内の弦楽四重奏団の登竜門として知られる宗次ホール弦楽四重奏コンクール。日本の注目若手クアルテット達が並み居る中、ドイツからダークホースも急遽頭角を表し、極めて高水準の演奏が展開された。

河井 拓(大阪国際室内楽コンクール&フェスタ総合プロデューサー)

宗次ホールの取り組み

宗次ホールはカレハウスCOO音楽屋の創業者である宗次徳一が「暮らしの中にクラシック音楽」という理念のもと2007年に名古屋の賑わう繁華街の中に設立した。年間300を超える自主公演を開催しており、国際的な一流音楽家の招致だけでなく、東海地方で学ぶ若手演奏家にも披露の場を提供して、愛知の音楽文化を支える柱となっている。

常設の室内楽団に「何が大変か?」と質問すると、返ってくる答えの多くが「継続である。若い音楽家にとって弦楽四重奏結成のきっかけは、主に大学の授業やセミナーの受講だろう。レッスン期間が終了し、大学の場合は単位を取り終えたら結成の目的は果たされ、再度集まることのない団体が数多く存在する。幸運なことに演奏依頼が舞い込んだり、自主的にコンサートを開催することで継続する場合もあるが、生活のための多忙な日々の中で、次第に顔を合わす機会も減ってくる。

室内楽コンクールの意義



名教師 原田幸一郎による室内楽マスタークラス

オラ、そして上野学園大学などで教鞭を執った中澤きみ子(ヴァイオリン)が顔を揃える。

久しぶりの開催で短い募集期間ながら、クアルテット・イギリス、クアルテット・リス、クアルテット・ミニミ、クアルテット風雅、そしてベルリンを拠点に学ぶヴァリオン弦楽四重奏団(日本人のヴァイオリニスト2名、トルコ出身ヴィオリスト、ベルギー出身チェリスト)が名古屋に集った。課題曲はベートーヴェンの第1番、第6番から1曲選択と、自由選択曲1曲という、シンプルながらアンサンブルの基礎とキャラクターが如実に表れる。

第5回コンクールの結果

家族の応援などで賑わうホールの中で、参加5団体が熱演を披露。昨年の秋吉台音楽コンクール室内楽弦楽四重奏部門で1位を受賞したクアルテット風雅、そして3位だったクアルテット・イギリスが高水準なのは期待通りだが、ベルリンから参加した結成僅か半年のヴァリオン弦楽四重奏団がダークホースとして異色の存在感を示すことになった。ベルリンで学ぶ元アルテミス・カルテットメンバー仕込みの、良く整理されて洒落つたつづりなベートーヴェン6番と、高い熱量ながら各声部をバランスよく歌い上げるメンデルスゾーン6番を演奏して、クアルテット風雅と同率1位を授与された。2位は無しで、クアルテッ



3人の審査員と宗次徳二



コンクールの概要と結果は、宗次ホールウェブサイトで確認できます。

(なおヴァリオン弦楽四重奏団のヴァイオリンは、兵庫県立芸術文化センターのスーパーキッズ・オーケストラ在籍経験もある垣内響太、垣内絵実梨の兄妹で、今後は弦楽四重奏団だけでなくデユオや、彼らが結成しているヴァイオリン四重奏「アカドフォニックス」でも日本での公演が予定されている。そちらの活躍も楽しみにしたい)

近年では音楽大学や室内楽アカデミーなどで、室内楽に熱心に取り組む若い音楽家が増えていく。そのような団体が継続するための目標となるよう、これからも国内での室内楽コンクールが活性化していくことが望まれる。

ト・イギリスが3位を受賞、4位がクアルテット・ミニミで、5位がクアルテット・リスという結果に終わった。ベートーヴェンの演奏が優れた「ベートーヴェンオマージュ賞はクアルテット風雅」「聴衆賞」はヴァリオン弦楽四重奏団が獲得した。

1位の両団体は弦楽四重奏としてのグローバルキャリアを目指すとのことなので、次は国際コンクールを目指して、更なる飛躍を期待したい。

本コンクールでは、大阪国際室内楽コンクール特別賞がクアルテット風雅に与えられた。この団体は2026年の第12回大阪国際室内楽コンクール期間中に、審査委員による無料マスタークラスを受ける権利が与えられる。